

国内経済情勢

概観

鉱工業生産、出荷は4月著増のあと、5月も速報ベースで大幅な増加を示した。このような生産、出荷の増勢は、国内最終需要の拡大テンポが依然みるべき変化を示していないうえ、ひところの生産、出荷の伸びが実勢以下にとどまっていたことに対する反動や、輸出の大幅増加などの要因が加わったためとみられる。こうしたなかで、このところ生産者製品在庫率が低下を続け、卸売物価が下げ止まり気配を示しているほか、商品市況の先行きについても、不安感がしだいに薄れつつあるようにみられる。

一方企業金融は、輸出代金の受入れ伸長、財政支払額の増大、インパクト・ローンの取入れなどにささえられて、季節的資金繁忙期を迎えたわりにさほどのひっ迫を示すには至らなかった。

この間5月の国際収支は、輸出の著増にささえられて52百万ドルの黒字を記録し、季節調整後の貿易収支黒字幅は、特殊要因の影響もあって294百万ドルの巨額に達したが、このような輸出の好伸は直接、間接米国景気の急上昇にささえられた面が強い。米国におけるドル防衛政策の進展、国内最終需要の根強さなど、国際収支の先行きについてなお不確定な面があるので、内外情勢の推移を慎重に見守る必要がある。

卸売物価は下げ止まり気配

最近の商品市況をみると、主力商品である鉄鋼、繊維はさすがに騰勢一服気配を示しているものの底堅い動きを続け、その他の商品についても、強弱区々ながら市況の先行きに対する不安感はいよいよ薄れつつある模様である。

商品需給の大勢をみると、輸出その他の最終需要が伸長しているほか、一部の業界では供給抑制による市況維持の方針を貫いていることなどから、さして引きゆるんだ状態とはなっていない。なお、末端流通部門ないしユーザー段階の在庫手当て態度は大勢として慎重さをくずしていないものの、一部にはいくぶん変化のきざしもみられないではない。

卸売物価は3、4月下落のあと、5月は保合いとなった。これには酒、たばこの値上げも響いているが、これを除いても中、下旬には下げ止まりとなり、6月上、中旬はそれぞれ+0.1%の上昇ならびに保合いとなった。

一方5月の消費者物価(東京)は、雑費(たばこを含む)、食料費、被服費等の上昇から前月比+0.6%と大幅な上昇を示し、前年同月比上昇率は+7.1%に達した。

生産、出荷は大幅に増加

鉱工業生産(季節調整済み)は4月に+3.3%と大幅に増加したあと、5月も速報ベースで+2.6%の増加となった。このように生産の増勢がここ一両月再び高まっているのは、ひところの伸び悩みのあと、耐久消費財(乗用車、一部家庭用電器)、

一般資本財(主として大型受注機械)がかなりの伸びを示しているためである。このほか5月には生産財(化学、石油、非鉄)もやや伸び率を高めた。

一方鉱工業出荷(季節調整済み)も、4月+3.6%の著増を示したあと、5月も速報ベースで+3.2%の大幅増加となった。5月の増加には、月々のフレの大きい船舶、鉄道車両が著増を示したことが大きく影響しているが、このほか生産財も、輸出増加の著しい鉄鋼を中心に久々にかなりの増加を示した。

生産者製品在庫(季節調整済み)は、4月微増(+0.3%)のあと、5月は速報ベースで+1.6%の増加となったが、ならしてみると、このところ増勢は鈍化ぎみとなっている。

以上のような出荷、在庫の動向を映じて、5月の製品在庫率指数(季節調整済み)は86.0とほぼ昨秋ごろの水準まで低下した。

設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷は月々かなりのフレを示しつつも根強い増勢を続けており、また先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)も2、3月減少のあと4月は前月比+38.5%の大幅増加を示した。4月の著増には期末受注分の一部が4月にずれ込んで計上されたなど、特殊な要因も働いている模様であるが、企業の設備投資態度は流動的とみられるので、今後の設備投資動向はなお予断を許さない。

個人消費の動向を百貨店売上高によってみると、4、5月は天候不順の影響もあってやや伸び悩みぎみとなったが、6月にはいって再び持直しを示している模様である。

銀行預金は持直しぎみ

5月の銀行券は1,645億円減と、前年同月(1,123

億円減)を上回る還収超過を示し、月中平均発行残高の前年同月比増加率も15.7%とほぼ前月(15.8%)並みに推移した。もっとも6月にはいってからは、前年比増加率は若干高まっている。一方5月の財政資金は、一般会計諸払や資金運用部融資が進捗したものの、租税、保険金等の受入れが引き続き大きかったため744億円の受超(前年同月1,282億円の受超)となった。このような動きを背景に、金融市場では月中467億円の資金余剰(前年同月111億円の資金不足)を生じたが、本行はこれを吸収するため多額の政府短期証券売却を実施した。コール市況は通月引きゆるむことなく推移し、とくに月末近くにはしだいに繁忙化し、6月にはいと季節的資金不足期を迎えて1日から月越物コール・レートが、また25日には翌日物、無条件物レートがそれぞれ日歩1厘の上昇をみた。

5月の全国銀行貸出増加額は2,038億円と前年同月(1,870億円)をいくぶん上回ったが、これはとくに都市銀行において、前年5～6月の資金需要期における貸出が6月にかたよって実行された事情を反映した面が強く、両月を通じてみれば本年の貸出が抑制基調を持続していることには変わりがない。このほか相互銀行、信用金庫の貸出も総じて抑制ぎみとなっているが、全国銀行信託勘定の貸出などは依然高水準を示した。

一方全国銀行実質預金増加額は3,668億円と、前年同月(3,517億円増)を4%方上回った。このところ預金がやや持直しぎみとなっているのは、輸出代金受入れの伸長、財政支払額の増大などによるほか、企業がインパクト・ローンの取入れなど資金調達を多様化しているためとみられる。企業の借入れ需要は3月期決算資金所要期を迎えたこともあって引き続きおう盛であるが、こうした

預金動向にもみられるように、総じてみれば企業の資金繰りはそれほど差し迫ったものとはなっていない。なお、5月の全国銀行貸出約定平均金利は、公定歩合再引上げの影響がほぼ一巡したため、わずかの上昇にとどまった模様である。

この間公社債市況は、大勢保合いに推移しているが、残存期間の長い債券はいくぶん強含みぎみとなっており、一部には底入れ感も台頭している。これは金融情勢に対する市場の先行き観を示すものとして注目されよう。

貿易収支黒字幅さらに拡大

5月の国際収支は、総合で52百万ドルの黒字となり、外貨準備高も前月減少のあと再び25百万ドルの増加を示した(月末外貨準備高1,919百万ドル)。これは、輸入が季節的増加月に当たるにもかかわらず、輸出がこれを上回る増大を示し、また長期インパクト・ローンの流入なども引き続き高水準を示したためである。当月の季節調整後の貿易収支は294百万ドルの大幅な黒字となった。これには不規則なフレもあり、これがそのまま実勢を示すとはいえないが、これまでのところ貿易収支は、輸出の好調にささえられて月をおって改善を示した。

5月の輸出(季節調整済み)は、前月比+14.2%

の著増となった。これには例年5月にかなり減少を示していた船舶輸出が本年は逆に増加したこと、米国における鉄鋼ストライキ見越しの鋼材備蓄輸入が引き続き増大していることなどの特殊要因の影響を見のがせないが、上記品目のほか合繊、自動車、光学機械、テレビ等の輸出も好伸びしており、地域別にみても当月は米国向けのほか東南アジア、西歐向けなども好調な伸びを示した。これは米国景気の急速な上昇が、直接、間接わが国の輸出に好影響をもたらしていることによる面が大きい。先行指標である輸出信用状接受額の動きをみると、5月は上記品目を中心に引き続き大幅な伸びを示したが、6月にはいって上、中旬は高水準のうちにも増勢が鈍化している。

一方輸入(季節調整済み)は、4月微減のあと、5月は+3.9%の増加を示し、月々のフレをならしめてみると、いくぶん増加ぎみとなっている。商品別にみると、くず鉄、銑鉄、羊毛等は低水準のままほぼ横ばい状態にあり、石油、木材、機械等の輸入は依然根強い増勢を持続している。もっとも先行指標である輸入承認額をみると、これまでのところ落着き傾向にとくに変化は現われていない。

(昭和43年6月28日)